朝日新聞
2007年（平成19年）
9月27日
木曜日

右側に見えるアンカレジ空港にアプローチ中の景色をモチーフに描いた作品

操縦席の感動 絵に

そこでしか描けない絵がある。日本航空のフライトエンジニア上田哲也さん（53）＝横浜市＝が手がける「コックピットアート」はまさにそうだ。飛行機の操縦室から見た情景をモチーフに、計器類も含めてリアルに表現する。乗務する旧型ジャンボの退役で、3年後には役目を終える。それでも天空からの感動を伝え続けるつもりだ。（池田隆壱）

コックピットアート

作品約40点が並ぶ個展「浪漫飛行」展が26日、新宿の小田急百貨店で始まった。出展作の一つ「747グッバイ アンカレジ」は、月明かりとオーロラ、雪に覆われたアンカレジ空港（米アラスカ州）を描いた。アナログな計器類も精巧に表現されている。

香港やパリなど約10カ国の空港や景色などを描いている。縦40㌢、横70㌢の大きさのキャンバスを中心に、アクリル絵の具を使う。

乗務するジャンボ機と作者の上田哲也さん（いずれも上田さん提供）

計器類も正確

フライトエンジニアはコックピットでシステムの監視などを行い、パイロットを補佐する。上田さんは総飛行時間約1万4千時間の大ベテラン。空の色や天候などはフライトごとに違い、「同じ景色は二度と見ない」という。

フライト中に「めったに見られなくて感動的」な場面に出会うと、乗務後すぐに場所と時間、高度をメモ帳にひかえる。この3要素が分かれば、そのときのエンジンの回転数などの計器類が示す数値は分かるという。景色を初めに仕上げ、最後に飛行中の計器類を正確に描く。一つの作品に約1カ月かかる。

輝くNYの街

好きなフライト風景は、オレンジ色に明かりが輝くニューヨークの街や、夜明け時に水平線から層状になった幻想的な光。「まるで天空人になったようです」と空の魅力を語る。

上田さんは高校卒業後、日本航空に整備士として入社した。入社後も「いつかは飛行機に乗務する」とチャンスを狙い夜間大学に通った。社内のフライトエンジニア登用試験に合格し、「あこがれの空の職」を手にした。

海外で披露へ

仕事も落ち着きだした30歳過ぎごろ、幼少のころから好きだった絵を見ようと、出張先の美術館を頻繁に訪れた。それがきっかけとなり「見よう見まねで」風景画を描き始めた。「自分だけしか出来ないことはないか」と考え、約4年前にコックピットアートを始めた。

フライトエンジニアを必要とする旧型ジャンボが日本航空で退役を迎えても、「空の仕事」は続けたいと考えている。「海外などで広く個展を開いていきたい」といい、飛行機の中をギャラリーにしたり様々なアイデアを練っている。

◇

個展は10月2日まで。30日午後2時から上田さんのギャラリートークがある。無料。問い合わせは小田急百貨店（03・3342・1111）へ。

日航の技師 新宿で個展

二度ない景色再現